便意と排泄欲求が叶えられる気持ちよさ、尾骨を亀頭で叩かれる感触、膨張感と開放感が代わりばんこにやってきて、もうなにがなんだかわからない。お尻だけの人形のように揺さぶられ、身体をガクガクさせているだけだ。

「あああ、ど、どうしようっ！　イキそうっ」

ピストン運動が激しくなるにつれて、膨張感や便意という苦痛を伴う感触は消え失せて、純粋な快感へと収斂していく。

優衣の身体のなかでふくらむ快感は、出口を求めて荒れ狂った。もうあと少しで、雑誌で読んだ、イクという状態になるとはっきりわかる。

「シュン、イキそうっ、もうイクよぉっ！」

好きな女の子の、はしたないほどの悶えようにけしかけられ、俊一も限界を迎えようとしていた。

輸精管いっぱいに押しあげられた精液が、今にも出口から溢れそうになっている。あと少しの刺激で、射精してしまいそうだ。

「イケよっ！　優衣っ」

ひときわ強く腰を打ちつけると、優衣の身体がベッドの上で弾んだ。

「イクゥッ！　イクイクッ！　イクゥ！」

優衣は、縛られたままの両手首をぎくしゃくと動かしながら、ベッドの上でぶるぶると震えた。

つるつるの腸壁が、今までに倍した強さできゅうきゅうと締まる。ねじれるような腸壁の動きに誘われて、ついに射精がはじまった。

「あああああっ！　熱いっ、熱いいいい！」

お尻の内側で起こった爆発は、初めての絶頂にあえぐ少女を、さらなる高みへとさらっていく。

一度出しているにもかかわらず、精液の量はびっくりするほど多く、弱くなったと思うと、また勢いよく出はじめて、なかなか終わりそうになかった。

俊一は、輸精管に残っている精液のひとしずくさえも搾りだそうとするような腸壁のうごめきに目を細める。

「い、いやああっ！　怖いっ！　シュンッ！」

熱い精液を受けるたび、目の前で花火が散る。散発的だった火花は、やがてポップコーンのようにすごい勢いで弾けだした。

優衣は濃密で深いセックスの快感に、恐怖と苦痛を覚えはじめた。

「シュン！　シュンッ！　ああああっ、怖いっ！　怖いよぉっ！」

お尻の筋肉がはっきりと緊張し、腰の両脇を持っている俊一の手に硬い感触をかえしてくる。

筋肉の硬さが限界に近くなり、優衣の上半身がのけ反った。手首を背中でくくられて、支えるものもないはずなのに、ベッドに伏している上半身が弓なりに反ったのだ。

「死ぬぅ……」

きりきりと食いしめていた腸壁がゆっくりと弛緩した。上半身がベッドに落ちる。脇腹が弱々しく上下している。

俊一がペニスを引き抜くと、栓を抜かれたアヌスから、白い精液がとろとろとこぼれた。

ぽっかりと開いていたお尻の穴が、ゆっくりゆっくりと収縮していく。身だしなみを整えながら、優衣の秘部をぼんやりと見ていた俊一は、優衣がぴくりとも動かないことに、ようやくのことで気がついた。

「優衣っ！　おいっ！　だいじょうぶかっ!!」

手首を拘束しているスカーフをほどき、ぐったりしている優衣を抱き起こす。うっとりと瞳を閉じた顔には、貧血の青白さはない。快感のあまり、失神しているらしかった。